飛鳥・奈良・平安仏教を一括して非仏教的としているのではなく、聖徳太子・行基・最澄・源信・源空などの行実は高く評価している。その態度が慎重であることはよく承知しているが、飛鳥時代以来、出家者中心の教団が置かれた政治情勢にあまりに重点をかけて、教団の基本的性格を論じるのは、必ずしも適切とはいえないのでなかろうか。宗教と政治は分離すべきものであることは当然であるが、仏教は、キリスト教などとは異なつて、政治と宗教とは隔絶すべきものとは伝統的に考えておらず、いわんやみずから権力支配を行おうなどとはしなかつたからである。権力者にあまりにも多く奉仕した律令仏教を非仏教的と評するなら、同様の批判は、本願寺教団の非人格性強化や一揆による領国支配にもきびしく加えらるべきであろう。それがこの書に明確に見られないことは、いささか片手落の感を禁じえないのである。

それにしても本願寺史をここまでに纒めあげた関係者の苦労は並々ならぬものであつたと推測される。続いて出版されるはずの第二・三巻は、既往の研究成果から推して、その編修は容易でない、と思われるが、困難をのりこえて一日も早く編修の完了することを切望してやまない。A5五五四ページ、図版別刷七葉、非売品、なお残本が若干あるので希望者は西本願寺伝道部にあてて金一、〇〇〇円と送料を添えて申込まれたいとのこと。

R. J. C. Butow, Tojo and the Coming of the War, pp. 584. Princeton, New Jersey, 1961.

中山治一

十二月八日――著者のいう「戦争の到来」から、ちようど二十年目の同じ月の同じ日に、この著書の書評を筆をとるめぐりあわせになつた。これはもちろん偶然であるが、しかし、その戦争の終結から十六年目、東条英樹の処刑から十三年目に、この『東条と戦争の到来』が刊行されたという事実は、同時代のできごとを客観化して眺めるのに必要な時間的距離という問題に関連して、したがつて現代史叙述の基本的な問題にかかる事柄として決して無意味なことではないであろう。

さて、作品を理解するためには、まずその著者を知らねばならないとは、一般にいいうることであろうが、しかし本書については、そのことがいつそう深刻な意味をもつているようにおもわれる。なぜなら、もし太平洋戦争への応召、軍務としての日本語の勉強、ついでマッカーサー司令部の情報部での勤務というような、いわばいくつもの偶然が外から彼に課した著者の生活体験がなかつたと仮定すれば、本書が著者によつて書かれるようなことは、ほとんど起りえなかつたであろうと考えられるからである。復員除隊の後、著者はスタンフォード大学でふたたび学生生活に入るが、卒業後、こんどは歴史専攻の学者として、昭昭二十六年秋から数カ月間、日本に

滞在する。このときの研究成果が、すなわち、彼の処女作であつて学位論文となつた。"Japan's Decision to Surrender"（邦訳『終戦外史』、時事通信社、昭和三十三年刊）である。その後も彼は何回か来日するが、ここに紹介する『東条と戦争の到来』は昭和三十二年に執筆をはじめ、足かけ四年をついやして完成された著者の第二作にほかならない。そのタイトルは、あきらかにチャールズ・ビアードの "President Roosevelt and the Coming of the War"（1941）を念頭において考えられたものであろう。著者の自信のほどが、うかがわれる。彼は現在、ワシントン州立大学の歴史学教授の職にある。

本書は、まつたく、右にみたような著者の特異な経歴と生活体験の産物であるといつてよい。ことに、著者がその体験から得た東条英機にたいする公正な理解と同情は、われわれ日本人の多くには欠如しているものである。彼の処刑から十年以上の歳月をへた今日、なお東条に関するひとつのモノグラフも、日本人の手によつては作られず、かえつて外国人である著者によつてはじめて生み出されることができた理由は、基本的には、そこにあるであろう。それは、当然われわれ日本人研究者に課せられた課題でありながら、しかも今日なおわれわれは、東条を純粋に研究対象として客観化しえない気持をもつている。じつさい、著者をして本書を書かしめる原動力となつているものが、著者の東条にたいする並々ならぬ理解と同情であることは、本書を一読する者のただちに看取しうるところであるが、それなくしては、彼の個性をえがき出すことは、ほとんど不可能であろう。

もちろん著者は、本書において、ただ東条英機の個性をえがくことだけを目的としているのではない。著者は、彼の生涯を描写することによつて、この個性を生み出しかつ後にはこの個性によつて支配された日本の現実――だいたい張作霖の爆殺事件から東条の刑死にいたるまでのちょうど二十年間の日本の歴史――を、叙述しようと意図しているのである。けれども、ひとりの個性をえがくことによつてひとつの時代史を叙述するということが、いかに至難のわざであるかということは、およそいちどでも歴史の叙述に経験のある人ならば、誰しも痛感しているはずである。それを完全になしとげることができるのは、おそらくランケやドロイゼン級の天才だけであろう。なぜなら、本来それは、二兎を追うものだからである。本書において著者は、「東条英機」と「戦争の到来」という二兎を追うた。そして、どちらかといえば、現代日本の時代史的叙述を犠牲として、東条英機のすべてをえがくことに成功したのである。本書の叙述が、日露戦争以前の時期からはじまり、そして――「戦争の到来」という表題にもかかわらず――東条処刑の戦後期にまでおよんでいること、つまり、表題と内容とのあいだに若干のずれが見いだされることも、そのことと無関係ではないと考えられる。

東条をえがくこととあいならんで、本書の成功している第二の点は、日本の軍部、ことにその派閥にたいする理解の深さと確かさである。この点は、普通の日本人の常識的理解をはるかに越えていることはもちろん、専門の日本人研究者の知識とくらべても、決してひけをとらないほどだといつてよい。なかでも、「皇道派」「統制派」という二大派閥にたいして東条がどのような関係にあり、また

どのような立場をとつていたかを述べたあたり（本書五十三ページ前後）、あるいは、ほんらい軍規と秩序をまもることに汲々としていた能吏型の小人物、満州軍憲兵司令官にうつてつけの――五フィート四インチの小柄で、眼鏡をかけ、年齢よりも老けてみえる（本書七十三ページ）――東条が、二・二六事件後の粛軍によつて生じた軍内部の真空的部分において、どうして権力地位の階段を一歩一歩のぼつていくことになつたかを述べたり（本書六十九ページ以下）、さらにまた、いわゆる「二キ三スケ」によつて代表される満州派が、なにゆえ、またいかにして中央政府の中枢に迎えられることになつたかを述べたあたり（本書七十四ページ以下）等々は、本書のもつ出色の部分であろう。

かように、東条をえがくことと軍部を叙述することに大部分の努力がはらわれ、またそれに成功している反面、日本の対外関係――とくに日本をとりまく国際関係が日本国内の政治的諸勢力消長におよぼした作用――が、均衡を失するほど簡略にしか述べられていない点は、本書の弱点というべきであろう。なかでも、ドイツの軍事的成功に眩惑された軍部内外のいわゆる親独派とその親独政策が、国内の政治的諸勢力の消長をいかに大きく左右し、国策の決定にいかに大きい作用をおよぼしたかを、体験的に知つているわれわれにとつては、日独伊三国同盟問題の本書におけるような取扱い（本書八十二ページ以下）では、とうてい満足することができない。もつともつと多くのページ数をさいて、ドイツとの提携、とくに軍事同盟締結の問題が、日本の政治と運命を左右することになつた経緯を、詳述すべきであつたとおもわれる。

しかし、叙述が簡略にすぎるとおもわれるのは、たんにドイツとの提携の関してだけではない。開戦前夜の日米交渉についてもまた、同様な感想をいだかせられる。本書の叙述は、ただ日本国内での動きをとらえるのに急なあまり、相手であるアメリカの態度をのべるのは、はなはだしく粗略である。いつたい、日米交渉の開始から十一月下旬の「ハル・ノート」の手交にいたるまでにアメリカ政府の対日政策に基本的な変更なり部分的な修正なりがあつたのかどうか、もしあつたとすれば、それはどの時点で起つたのであるか、そしてそれを受けて立つ側の日本の内部ではそれにたいしていかなる反応が起つたのか、あるいは起らなかつたのか――といつたような点の叙述が、本書にはまつたく欠如している。アメリカ人であつてしかも日本現代史の専門的研究者である著者にたいして、われわれ日本人の期待するところは、まさにそのような点の叙述にあるわけだが、そのような観点は、残念ながら、著者の視界からまつたく逸しられている。このような、日米交渉にたいする純粋日本的な視角も、そしてさきに述べた日独提携問題の簡略な取扱いも、ともに、おそらくは、国際的環境のなかでの日本のひとつの時代史を叙述することよりも、むしろ日本の国内的な政治状況のなかで東条をえがくことに成功している本書の基本的性格と、深く関連するものであろうと考えられる。

もつとも、日本の政治のあゆみが、外的条件――国際政治の動きや国際的勢力の消長――によつて、いかにひどく屈折させられ、ゆがめられたか、その程度のはなはだしさを真に理解することは、外国人にとつてはあるいは不可能かもしれない。欧米人、ことにアメ

リカ人にとつては、内政が基本であり主であつて、外政は末であり従であるという一種の固定観念があるのではないかとおもわれる。また事実、かれらの国々では、現実の政治がそのようになつているのかもしれない。ところが、日本では、すくなくとも攘夷・開港論いらい、征韓論・清国膺懲・臥薪嘗胆・満蒙経営・対ソ戦略をへて、ついに「大東亜共栄圏」建設にいたるまで、つねに外の問題が内の政治をひきずつてきた。国策決定における軍事的考慮の優越、したがつて政治における軍部の優越的発言ということもまた、根本的には、そこから出てくる問題であろう。日本軍部の特殊的意義は、機構論的にはもちろん統帥権独立の問題を軸として把握されるのが当然であるが、しかし機能論的には、そのような政治における対外政策の優位ということを関連づけて理解されるべきである。要するに、日本の政治史には、欧米諸国のそれに見られない特異な屈折とひずみ――外の問題が内の政治をひきずるという面――が、ほとんどつねにつきまとつているわけであるが、そのような点での深い洞察が本書に欠けていることもまた、やむをえない。

つぎに、著者の利用している史料にも関連する問題であるが、本文五四〇ページにおよぶ本書を通読してあとに残るのは、やはりそれが全体として極東軍事裁判の記録によつて大きく左右されているという印象である。一般に、国際関係史の本格的研究が、第一次世界大戦の後には、各国の外交文書の刊行からはじまつたとすれば、第二次世界大戦後のそれは、ニュルンベルクおよび東京の国際裁判における諸種の裁判調書を出発点としていたということができる。そのかぎりにおいて、著者もまた研究の正道を行つているわけであり、まして彼自身が占領軍司令部に勤務していたのであるから、彼がその記録文書を史料として利用したのも、きわめて当然のことである。のみならず、著者は、東京裁判をつねに批判的に見ることをわすれず、たとえば、東条の問題に関していえば、むしろ東条には弁護的であつて、キーナン検事には点数がからいほどである。その場合、批判する著者の公正な眼は、まさに歴史そのものの眼であつて、ここにもまた、本書の高く評価されるべき点のひとつがある。といつてよいであろう。

ところが、それにもかかわらず、なお本書が、全体として東京裁判の設定した目に見えない枠を大きく踏みくだくところまではいつていない。このことは、部分的現象としては、たとえば広田内閣の評価（本書八十ページ以下）のごときに、もつとも端的にあらわれているが、しかしここで評者のいつているのは、そのような個々の人物や集団にたいする評価の問題に関してではなく、むしろ本書の叙述内容が全体として、東京裁判の設定した枠組みの外まで出ることができなかつたという点についてである。この場合、著者自身があまりに近すぎるところからその裁判を見聞きしたという体験が、裁かれる対象を歴史として叙述するさい、かえつてマイナスの方向へ働いたのではないかと推測される。このあたりに、現代史研究の宿命的な困難さがあるのであろうが、ともかくそれは、著者の力量の不足というよりは、むしろ対象との時間的距離の不足に由来するところの、現代史研究の本質的な問題にかかわるものであろう。

以上、読後の感想をそのまま一気に書き下したので、あまりにも

印象的な書評になつたようである。その主観的にすぎた印象批評をいくらかでも客観的な方向へ補正するために、順序が逆になつたけれども、つぎに、本書の構成とその各部分の内容を要点的に記しておく。

本文の全体は、三篇にわかれている。まず「サムライの蔭に」と題された第一篇は、第一章「東条の若き時代」から第五章「東亜新秩序に向つて」まで、内容的には、東条の家系や生い立ちからシナ事変解決の失敗・近衛内閣の辞職までを取扱う。つぎの「不可能を可能にする」と題された第二篇は、第六章「国策の結晶化」から第十二章「昨十二月七日」まで、内容的には、平沼内閣の成立から真珠湾攻撃までを取扱う。最後の「天の意志」と題された第三篇は、第十三章「国民の運命」から第十六章「その人（東条）の運命」まで、内容的には、太平洋戦争のはじめから東条の刑死までを取扱う。そのあと、巻末には、十八ページにおよぶ史料文献目献がつけられている。

最後に、本書は、プリストン大学出版局から刊行されている。『第二次大戦外交史』叢書の一冊として出版されたものであり、わが国でも周知のハーバート・フェイスの『真珠湾への道』その他とともに、一連のシリーズをなしている。これによつても、アメリカ本国における本書への評価がどれほどのものか、ほぼ推察されよう。いずれにしても、本書が、この方面の研究における本年度最大の収穫のひとつであることは、まちがいないところであろう。

附記　評者が本書を読みおわつて後、本書の邦訳書が出版された（木下秀夫訳『東条英機』上下二巻、時事通信社発行）。評者はまだ邦訳書の全部に目をとおしていないが、しかし第一章のはじめのところに出てくる一九〇五年七月末の有名な「桂タフト協定」を、「タフト・勝浦協定」と訳しているところをみると、訳者は歴史的知識をあまりもつていない人のようにおもわれる。以上、訳書については蛇足であるが、附記しておく。

（五八四頁　一九六一年五月 Princeton University Press　一〇弗）